

豊庄だより



第 531 号 2018 年 9 月 3 日

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

前号で特攻隊のことが書かれた 2 冊の本を紹介しました（『不死身の特攻兵～軍神はなぜ上官に反抗したか～』と『青空に飛ぶ』）。著者の鴻上尚史さんは若者向けのテレビ番組でもよく登場し、なかなか面白いことを言う人くらいしか印象は残っていませんでした（NHKBS2 で放送中の「COOL JAPAN」の司会者）。それだけにまさか特攻隊のことを真正面から書くとは思いませんでした。しかも 2 冊も。この 2 冊の本は今、大変評判になっているらしく、西日本新聞は 3 回にわたって朝刊に特集の記事を載せました（8 月 20 日～22 日）。テーマは「自分らしく生きる」。芥川賞作家の村田紗耶香さんと鴻上さんの対談という形でした（1 回目が「同調圧力が強まる中で」、2 回目が「こんなに息苦しい国はない」、最後が「空気を読まずに生きるには」）。村田さんの芥川賞の受賞作となった『コンビニ人間』（文芸春秋）は、コンビニエンスストアで 18 年間アルバイトを続ける主人公が、「結婚」や「就職」など「普通の生き方」を求める世間の圧力を受けながらも、生き生きと働く物語です。

対談の内容を一部ですが紹介します。鴻上さんがまず、「『コンビニ人間』は刊行された時にすぐ読み、ストーリーを重視しない芥川賞の受賞作なのに面白かった」と述べ、登場する主人公が世間から「普通」であることを強制されるリアルな描写は、村田さんの体験からですかと問いかけます。

この問いに対し、村田さんは、（自身の体験ではなく）友だちから会社の中で「そろそろ結婚しないのか」と聞かれていやな目に遭ったり、「子どもを産まなきゃいけない」と追い詰められた切実な話を聞き、「普通の人」という視点に変な感じがしたと答えています。さらに、自分も小説に登場する主人公に、「何で定職につかないの？」と言ってしまふ「普通」の側の人間かもしれないと話しています。

ここに鴻上さんと村田さんの接点を感じました。鴻上さんの本に出てきた上官の命令に背いて 9 度生還した元特攻兵と、社会の既成概念に対する違和感を大切に作る村田さんの作品には通じるものがあります。「空気を読め」と、多数派の意見を押し付ける社会、その中で自分らしく生きるにはどうすればいいのか。2 人の作品にはこんな現代的課題が底流にあるのを感じました。

対談に戻ります。「では、空気を読まずに生きるにはどうすればいいのか」について 2 人の考えが示されます。鴻上さんは、「空気を意識しながらも、それに無条件には従わない、それとうまく付き合っていくという道を選びたい」と述べています。一方、村田さんは、「違和感って宝物です。生きていく中で、ついうっかりその場では空気を読んでしまっても、そこであった違和感をごまかしてしまうと、違和感すら覚えられない人になってしまう。そうすると、自分が何なのか、本当に何を考えているのか、分からなくなる。だから、違和感を大事にするのが自分を取り戻す方法なのではないかと思います」と。

3 回に及ぶ対談は、文学者同士によるためか、かなり難解なところもありますが、ちょっと立ち止まって考えようという気持ちにさせてくれました。（いろいろと書きましたが、実は私はまだ『コンビニ人間』を読んでいません。純文学の芥川賞はちょっと苦手です……。でも紹介をしたからには読みます！）

